

8 吉田先生から教わったことやエピソード等を思い出すままに

吉田先生から教わった射技射法については、私から申し上げるまでもなく、以下の書籍を参考にして下さい。私が教わったまさしくそのものが書かれています。従って、本稿ではそれ以外のことで教わったことやエピソードを、思いつくままに綴ってみることに致します。

- ◎「日置流竹林派正法流要諦」（紫鳳会 発行、非売品）
- ◎「弓の道 正法流入門」（紫鳳会編集、BAB ジャパン出版局発行）
- ◎「正法流 弓道いろは訓 吉田能安先生の教え」（寺田隆尚 文藝書房）

（1）大前「おおまえ」、大後前「おちまえ」、大後「おち」等について

田舎から上京した私にとって、「おおまえ」「おち」と言う表現は初めて耳にする言葉で、漢字ではどのように表すのか、先生にお聞きしたところ、以下のようにメモ用紙にお書きになり、教えて下さいました。

1 的～5 的までの別称について

＜5人立ちの場合＞	＜4人立ちの場合＞	＜3人立ちの場合＞
1 的 (大 ^{おおまえ} 前)	1 的 (大 ^{おおまえ} 前)	1 的 (大 ^{おおまえ} 前)
2 的 (大 ^{おおまえつぎ} 前次)	2 的 (大 ^{おおまえつぎ} 前次)	2 的 (中 ^{なか})
3 的 (中 ^{なか})	3 的 (大 ^{おちまえ} 後前) × 落前	3 的 (大 ^{おち} 後) × 落
4 的 (大 ^{おちまえ} 後前) × 落前	4 的 (大 ^{おち} 後) × 落	
5 的 (大 ^{おち} 後) × 落		

（2）「手ぐすねを引く」の語源について

手のひらに、くすねを引く行為は、ある本で「弓が手から飛ばないようにする」と説明されておりましたが、吉田先生からは、以下のような理由から、「弓返りをさせない」ためであると、教わりました。

『物陰に潜んで、弓手の掌に薬煉（くすね）を引いて、敵を待ち伏せ、頃合いをみて一斉に攻撃を仕掛ける。掌に薬煉（くすね）を引く行為は、弓返りを防ぐ為である。弓返りすれば、弦を返さなければならず、次の矢をつがえるために時間がかかり、速射の妨げになり、攻撃力が半減する。故に、弓返りをさせないために、戦いの前に掌に薬煉（くすね）を引いたことから、「手ぐすねを引く」（準備万端整えて、好機の到来を待つ）という、ことわざが生まれた。』のだと。

（3）「把分け（はわけ）」について

普通は一手の一本だけ中ったものを「把分け・束分け（はわけ）」と言う。四つ矢でも、「はわけ」使うので、広義で使える「半分・半別（はわけ）」の字を当てることが出来る。「十把一絡げ」という表現があるように、「把」は、「束ねたもの、一束、一手」の意。

(4) 相撲の行司の言う「発気用意（はつき（け）ようい）」について

不 発 気	不 用 意	不 成 技	不 生 力
意 を 用 い ざ れ ば	気 を 発 せ ざ れ ば	技 成 ら ず	力 生 ぜ ず

吉田先生は相撲の行司の言う「発気用意（はつき（け）ようい）」の語源を、左記の通り説明され、これは弓道にも通じることであると説かれました。身振り手振りを交え、我々学生を笑わせ、我々もまた納得し、感心したものであります。かみ砕いて申し上げますと、

「もしもし、相撲とりのおふたりさん、
気力を出さなければ、力も生まれませんよ。
創意工夫をしなければ、技も掛かりませんよ。
気力をだして、もう少し考えて相撲を取りなさいよ。」

とでも、なろうかと思えます。説明されている時の先生の得意げな笑顔が忘れられません。

(5) 造語の名手であった吉田先生 「一息一力」等について

一 念 一 息	一 息 一 力
い ち ね ん い っ そ く い ち り き	い っ そ く い ち り き

造語の名手であった吉田先生が、初めは「一息一力」だけの表現でありましたが、後にその前に「一念一息」をつけて、語呂や調子が良いと言われるようになったと記憶しております。

『代悲白頭翁』の有名な対句「年年歳歳～、歳歳年年」を、ヒントにされたのでありましょうか、定かではありません。『一つの思いは一つの息で一つの力は一つの息で』と、これを弓道に生かさなければならぬと強調されておりました。

例えば、「頑張ろう」と一息で。これが「が・ん・ば・ろ・う」と二息や三息では、思いは叶いません。大三から会に至る過程で、吸ったり吐いたりではなく、吐く一息で均等に開かれる鋭い力が生まれると。

その他の造語に、弓道は立って行われる禅のようであり、『立禅』と言われておりました。『本日無事』は、考えようによって逆から読むと、「事なき日の本」となり、なかなかおもしろいと。遊神館弓道吉田教場の『遊神館』も、神々が遊ぶ（交わる、戯れる、弓の稽古をする）館と、吉田先生ならではの命名だと思われまます。神については、我々学生に向かって、「正しいことをする、それは神そのものではないか。正射、すなわち正しい射を引くことは神に通じる。諸君は誰でも神になれるのだ。」と熱っぽく語っておられました。従って『遊神館』とは、意味も語呂も良い味わいのある道場名であると、私は吉田教場に足を運ぶ度に、いつも思っております。

(6) 桜美林学園創設者 清水安三 学長先生の粋な計らい

大学四年の時、吉田教場で稽古を終え、居間にお礼のご挨拶に伺うと、吉田先生から、「学長先生とお話がしたい。取り計らってくれ」と言うお話がありました。翌日そのことを学長先生にお願いすると、快く日時を設定して戴き、数日後体力のある後輩の一人を介添えに連れて、西荻に伺い吉田先生を大学の学長室までご案内したのであります。お互いが同じ年齢で、若かりし頃は互いに中国大陸で活動されていたため、話題はそのことが中心となりました。お話が進むに連れ、共通の友人も分かり、今度は三人でお会いしましょう等々、すっかり意気投合されたのであります。

翌朝、私の下宿に吉田先生からお電話があり、関節ロイマチスに悩まされていた先生にとって、学長室でお座りになった木製の椅子が、痛みが無く大変気に入入り、知り合いの大工さんに作って戴くので、その寸法を測ってくれとのことでありました。

早速そのことを学長先生にお話し申し上げたところ、「測らんでよろしい。その椅子を持って行きなさい。」そして付け加えることに、「先生には永遠にお貸しします、と言うんじゃぞ」と言われるではありませんか。

その日の午後に、先の後輩にその椅子を持たせ西荻まで伺い、この始終をお話申し上げますと、「そうか、そうか」と愉快そうに笑っておられました。このことから共通の友人を介し更に親交を深められたそうであります。

これが、同じ明治二十四年生まれ、かたや教育界で、かたや弓道界で大家と成られたお二人の最初の出会いでありました。

(7) 吉田先生に叱られ学んだこと

「おまえはそれでも主将か！」早朝、吉田先生に西荻に呼びつけられ、ものすごい剣幕で怒鳴られ続けました。余りの怒りの形相に、どっと涙が溢れ、ただただ「申し訳ありませんでした。」と声にならぬ声で、必死に謝り続けたことを、今でも鮮明に記憶しております。四月には、恒例の新入部員歓迎コンパが開かれます。関節ロイマチスに悩まされ、お体が不自由な吉田先生を大学生のどんちゃん騒ぎに、更には八十歳を超える方を、しかも電車で一時間三十分（当時）もかかる町田へお呼びするのはいかがなものだろうか。多分お出でにならないだろうと勝手に決めつけて、ご招待しなかったのであります。私としては、最大限配慮したつもりでありましたが、浅知恵であったのです。「行くか行かないかは、招待を受けたこちらが決めること。」要するに、師範という公的な立場にある先生を招待しなかったことは何事か、ということなのであります。先生に叱られると、「あなた、それくらいでいいじゃありませんか。」と仰る奥様の言葉に、何度も助けて戴きました。

最近、親戚に冠婚葬祭があれば、私が呼ばれて采配を振るう年代となりました。吉田先生からは、このことを含め、参集範囲、上座下座の席、親族と姻族の違い等々、折々にいろいろなことを学び、そのことが大変役立っております。

(8) 「臍眼居士」

臍（さい）とは文字通り、ヘソのことであり、身体の中でも大事なところで、古来よりいじると良くないと言われております。吉田先生がお若い頃、中国大陸滞在の折、この教えを破り、それがもとでヘソが化膿し、死の苦しみをされ危うく一命を取り留められたそうであります。以来「要所は大切に」ということを痛感され、「ヘソで開眼した」ことから、『臍眼居士』と名乗るようになったとのことでありました。これは、昭和四十七年、富士五湖の一つ西湖で行われた春合宿の講話で伺った、感動的なお話の一つであります。父が戴いた書には、よく『臍眼居士 吉田能安 書』と書かれておりました。

(9) 部歌が作られた経緯

一期生が四年生の時の秋、「前年の弓道部初の夏合宿、あの思い出の松原湖へもう一度行ってみたい。」と言う声が、誰からともなくわき起こり、急遽三泊四日の秋合宿が企画されました。吉田先生に相談したところ、関節ロイマチスが進行し同行できないとのこと、残念ではありましたが相馬部長先生と我々部員だけで実施され、学生により自主的に運営できるという成果を挙げ、独り立ちした実りある合宿となりました。

桜美林の部歌はこの時の合宿で、私がヒントを得て作ったのが始まりなのです。「～大学」「～学院大学」のどちらか思い出せないのですが、そのどちらか一方と、偶然その合宿の期日が一日だけ重なったのです。勿論道場もこちらが玄武館、そちらが第二玄武館、宿泊する部屋も別々であります。重なった一日がその大学の合宿最終日。彼らはその夜に宴会を開き、興に乗った男子学生が大声で、『お座敷小唄』に弓道に関する歌詞をつけ、替え歌を歌っているのが聞こえてきました。歌詞は忘れましたが、面白可笑しい歌だったと記憶しております。この時私は「作曲の能力もないし、こんな風に何かの歌に歌詞をつければいいんだ。よし卒業までになんとか作ってやろう」と思ったのです。

合宿を終え数日して、教員採用一次試験の合格通知が届き、気分良く下宿の風呂につかっていると、東京音頭のメロディーが自然頭に浮かんだのであります。そして一気に歌詞ができあがりました。忘れてはならない、書き留めなければと、すぐさま風呂を出ると駆け足で部屋に直行し、ノートに書き写したのであります。翌日副将の井深君に見せ歌って聞かせると「これはいい、部歌にしましょう」となり、それが後輩諸君に歌い継がれ現在に至っているのです。

考えに考え、歌詞を何回も練り直したわけではありません、本当に気分良くスーと一回で出来たのであります。なんと不思議なことでありましょう。

この部歌も、吉田先生のお導きにより出来上がったような気がしてなりません。吉田先生の巻藁射礼に感激した創部初の夏合宿がなければ、翌年の秋合宿は企画されず、『お座敷小唄』の替え歌にも巡り会うことがなかったのです。

新入生歓迎コンパや、追いコンには、吉田先生も必ずご出席になり、最後のお開きには、吉田先生も学生と一緒に音頭をとりながら、この部歌を楽しそうに歌って下さいました。そして最後に大声で「早く一人前になれよ！」と（爆笑）。

桜美林大学弓道部 部歌

(東京音頭の替え歌)

- 1 : はあ～ 桜美林弓道部は 矢とりから始まるよ よいよい
稽古はじまりや 安土立場の往復で
やっとそれで半人前 やっとそれで半人前
- 2 : はあ～ 矢とり終われば 鳴きの稽古 よいよい
朝から晩まで 中り中りと声枯らし
やっとそれで半人前 やっとそれで半人前
- 3 : はあ～ 鳴きを終われば ゴム弓の稽古 よいよい
鬼の先輩 射道八節繰り返し
やっとそれで半人前 やっとそれで半人前
- 4 : はあ～ ゴム弓終われば 巻藁の稽古 よいよい
巻藁 巻藁 巻藁 巻藁三ヶ月
やっとそれで半人前 やっとそれで半人前
- 5 : はあ～ お待たせしました 的前の稽古 よいよい
初めて中った 初めて中った感激で
弓道一筋四年間 弓道一筋四年間

(10) 我が部に対する吉田先生の指導方針

吉田先生が師範を引き受けられたのは七十九歳と、先生の晩年とも言えるお年の時でありましたので、若い頃ならいざ知らず、先生が直に学校の道場へ指導へお出でになることは、めったにありませんでした。従って、主に部員がご指導戴けるのは、春合宿や夏合宿の一週間です。

「俺がいないとき誰が指導するんだ。主将や副将だろう。だから幹部を徹底的に鍛えなければならないのだ。」と、それが先生の我が部に対する方針であり、主将や副将は、できる限り日曜日や休業日に西荻の吉田教場に稽古に出かけ、射技射法を教わりに来るように厳命されました。それを部に持ち帰り部員を指導する、いわば伝達講習のような形式で、毎日の部の活動が行われたのであります。

私は大学卒業と同時に幸運にも公立高校の教師となり、弓道部の顧問を長らく勤めさせて戴きましたが、このことが大いに参考になった次第であります。教員でありますから、教科指導はもちろんのこと、学担として学級指導、進学指導講習、生徒指導、職員会議、研修会、出張、各種会議、外郭団体の事務局の仕事、海外研修引率等々があり、毎日放課後に弓道部を指導できるわけではありません。そんなとき、「俺がいないとき誰が指導するんだ。」という先生のお言葉を思い出し、部の指導・運営に、そのことを取り入れさせて戴いたものであります。

そのように弓道部を指導する過程において、逆に生徒から教えられたと思うことも、数多くあります。指導のし過ぎは、かえって自主性を削ぎ、人任せになり、困難を切り開く力が育たないことであります。「明日は先生が出張で君たちの指導ができない。創意工夫をこらし、自分が飛躍できるチャンスだと思いなさい。」と言えるようになったのは、恥ずかしながら大部後になってからのことでもあります。勝ちたい、弓道部の成果を挙げたい、その焦りが過指導に繋がるのです。その他にも生徒から教えられたと思うことは、率先垂範先ず自らが弓を引いて見せることが、言葉による指導よりも、はるかに効果があるということでもあります。吉田先生が我々に感動を与えてくれたあの巻藁射礼が、まさしく良いお手本なのです。今後の弓道の指導においても、このことを肝に銘じ、教訓として生かしていかなければならないと考えております。